

佐野日大に春切符

2026 SPRING KOSHIEEN



新毎日新聞

1月30日(金)

2026年(令和8年)

発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321
毎日新聞東京本社



秋季県大会で優勝し記念撮影に応じる選手、監督ら＝宇都宮市の清原球場で2025年10月5日、池田一生撮影

磨いた守備 真価を発揮

「うちにスターはいない。一人一人が懸命に役割をこなし勝ち上がることができた」。麦倉洋一監督がこう振り返る昨秋の選手たちの躍動。モットーの「つなぐ攻撃」と「粘り強い守備」をチーム全員で体現し、県大会2連覇と関東大会4強進出を果たした。

打線は小林優太(2年)や須田凌央(1年)らが軸。後続につなぐ意識が徹底され、小技や脚を絡めた攻撃も光った。関東大会1回戦の中央学院(千葉)戦では12安打に加えて7四球を選ぶしぶとい攻めが8-7の勝利をもたらした。

主戦投手の右腕・鈴木有(2年)は制球力とデンプの良さが持ち味。関東大会では全3試合で先発し、7-0でコールド勝ちした準々決勝・駿台甲府(山梨)戦では8回をゼロに抑える好投で4強入りに貢献。遊撃手・吉沢悠(2年)を中心とした、鍛え上げられた守備も秋季大会を通じて真価を発揮した。

麦倉監督は「秋は彼らの頑張りが実った。ただ、これから強くなれるかは自分たち次第だ」と部員たちのさらなる成長に期待を寄せ、中村盛汰主将(同)も「一人一人がもともとレベルアップが必要だ」と飛躍を誓う。寒空の下で鍛錬を重ねる選手たちが、大輪の花を咲かせる春はもうすぐそこだ。

12年ぶり5回目

第98回選抜高校野球大会(毎日新聞社、日本高校野球連盟主催、朝日新聞社後援、阪神甲子園球場特別協力)の出場校を決める選考委員会が30日、大阪府北区の毎日新聞大阪本社オーバルホールで開かれ、県内からは佐野日大の12年ぶり5回目の出場が決まった。県勢としては2年ぶりの選出となった。大会は3月6日に組み合わせ抽選会があり、同月19日に兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で開幕する。

【池田一生】

「つなぐ野球」で関東4強

センバツ決定 特別号外 3月19日 開幕

学校プロフィール

1964年に日本大の付属校として開校。校訓に自主創造、文武両道、師弟同行を掲げる。普通科に「α」「特別進学」「スーパー進学」「N進学」の4クラスがあり、生徒1195人(1日現在)が学ぶ。サッカーや剣道、ゴルフ、陸上競技など多数の部活動が全国で活躍する。硬式野球部は開校した年に創部し、甲子園に春4回、夏6回の出場を誇る。前

83・25・0111。

佐野市石塚町2555(代表電話02

応援できる幸せを、
ありがとう。



日が暮れるまで、ボールを追いかけて。
夢中でバットを振って、手にまめをつくって。
いつしかその背中は、たくましく、大きくなって。
試合を観るたび、あなたの活躍がうれしくて、たまらなくて。
悩んでいるときは、なにかできることはないかと探したりして。
気づけば、自分のことのように勝利を願っていて。

ありがとう。応援できる幸せを教えてください。

今日までの努力の日々を信じて。

春へ。いってらっしゃい。



秋季関東大会準々決勝でコールド勝ちし、スタンドの応援団に向かってガッツポーズをする選手たち―いずれも甲府市の山日YBS球場で2025年10月21日、池田一生撮影



秋季大会で4番に座り勝負強い打撃が光った須田凌央―2025年10月21日、三浦研吾撮影



花咲徳栄戦の八回裏佐野日大2死一、三塁、青木裕弥の適時二塁打で一塁から生還した中村盛汰主将(背番号5)を笑顔で迎える佐野日大の選手たち―2025年10月25日、三浦研吾撮影

センバツまでの軌跡

- <県大会>
2 回 戦 ○8－1 宇都宮南
(七回コールド)
3 回 戦 ○4－1 栃 木
準々決勝 ○6－3 作新学院
準決勝 ○6－4 国学院栃木
決 勝 ○4－3 文星芸大付
(延長十回タイブレーク)
<関東大会>
1 回 戦 ○8－7 中央学院
準々決勝 ○7－0 駿台甲府
(八回コールド)
準 決 勝 ●4－7 花咲徳栄

秋季関東大会準決勝の花咲徳栄戦で八回に本塁へ生還する中村盛汰主将―2025年10月25日、三浦研吾撮影



秋季関東大会では3試合に先発し力投した鈴木有―2025年10月25日、三浦研吾撮影



購読お申し込み

毎日新聞のニュースサイト
<https://mainichi.jp/>

専用フリー
ダイヤル

ヨムハマイニチ
0120-468012